

## 國際關係

### 一、亞細亞勞働會議の結成

結成經過

一九二五年の第七回勞働總會出席の日本勞働代表鈴木文治氏と印度勞働代表エヌ・エム・ジョーンズ氏との間に、始めて亞細亞勞働會議結成に就ての協議あり、越えて一九二八年第十一回勞働總會の日本勞働代表米宮滿亮氏と印度勞働代表側のバツケール氏とロンドンに於て、亞細亞勞働會議に關する覺書の交換となり、着々其の準備が進められ、翌一九二九年九月、孟買に於て米宮日本側代表と全印度勞働組合會議側幹部との間に日印準備協議會が行はれ、規約其の他に關する大體の準備が完了し、翌一九三〇年に愈々亞細亞勞働會議の結成を見るの運びとなつた。

然るに一九二九年十二月に開催せられた全印度勞働組合會議の大會に於て、左翼共產派が大勢を制し、反帝同盟への加入繼續、亞細亞勞働會議參加拒絶、國際勞働會議否認等の議案が可決せらるるに至り、此の趨勢を察知して、大會前亞細亞勞働會議の主唱者である社會民主主義系のジョーンズ、バツケール、チャマンラル、シバ、ラオの諸氏の率ゐる四十二組合は、全印度勞働組合會議より脱退し、新に全印度勞働組合會議を組織するに至り、此の印度勞働運動界の混亂は遂に亞細亞勞働組合會議の結成を一時延期するの已むなきに至つた。

而して一九三三年六月壽府に於て開かれた第十七回勞働總會に出席せる坂本日本勞働代表、アフダブ・アリ印度勞働代表、ソニン、シャン支那勞働代表の間に數次の會見が行はれ、亞細亞勞働會議に關する打ち合せをなした。

かくて一九三三年九月の組合會議第二回大會に於て、亞細亞勞働會議結成促進に關する件が議題となり、結成促進の決議並に亞細亞勞働會議要綱が決定せられた。而して一方印度側には、一九二九年十二月に於て前記の如く左翼の全印度勞働組合會議と脱退組織せる全印度勞働組合會議との對立抗争があつたが、左翼派は漸次凋落し、其の陣營の大部分は聯合會に加盟するに至り、事實上全印度勞働組合會議の統一と陣營の確立を見たので、一九三三年十二月に開かれた同聯合會大會に於て左の決議が採擇せられた。

一、本聯合は廣くアジアの關係諸國に存在する反對又は微温的態度が存在する理由の爲めに、一九三一年の國際勞働總會が決定せるアジア勞働會議が開催されなかつた事を深く遺憾とするものである。故に本聯合は一九三四年に右記アジア勞働會議を開催するやう國際勞働機關を督促すべき事を決議す。

二、本聯合は、又昨年、國際勞働總會に出席せる日本、支那、印度各國の勞働代表が右記せる國際勞働機關によるアジア勞働會議の結成が不能に陥りし場合に於ては右三國及これに参加を希望する他のアジア諸國の勞働者のみの代表者を以てアジア勞働會議を結成すべき事につき協議せる事を確認す。本聯合は更に最近アジア勞働會議につき日本勞働組合會議に於て決議せる趣旨に賛意を表す。(茲に日本勞働組合會議大會の決議文あるも省略す)

三、最後に本聯合はアジア勞働會議を一九三四年に開く事が便宜であるか否かにつき關係アジア諸國の勞働團體に交渉すべき事を執行委員に一任する事を決議す。

此の全印度勞働組合會議大會の決定の報を得たので日本勞働組合會議は正式に米宮書記長より、印度聯合會主事バツケール氏に宛て、亞細亞勞働會議のための日印兩國協議會の開催を五月コロンボに於て開催したき旨の電報を發し、バツケール氏